

ヘルパー8人がナマ証言!「新人が逃げ出す介護実態」

昭和13年10月18日第1種郵便物認可 第58巻第49号通巻2684号
平成11年12月5日発行(毎週日曜発行)

週刊読売

超簡単
パソコン
「選ぶ」「使う」

1999.12.5 300yen

The Yomiuri Weekly



揺らぐ宇宙開発

コンビニで金貸し
都銀が札束で狙う あなたの借金データ
●消費者金融 金利は下がる ●自己破産が急増する

米国で一流科学者150人が協力して、裁判を自動化するスーパーコンピュータを開発した。これを使えば、どんなに複雑難解な裁判でも、瞬時に正確な判決を下すことができる——そう聞かされても、半信半疑の方が多いかも。しかし国際的に名高いCNNが、トップニュースでこれを報じたとしたら？



- ▲犬の娯家
—愛犬家なら、ついひっかりそう
- ▲ボードセーリング
—ボードに乗ってハワイからカリフォルニアを目指す。当人が海の上で、取材できないところがミソ



「なぜか笑える」 ママスコミ 騙す男

有力メディアも次々えじきに

結論から言えば、コンピュータ判決の話は全くなのでつち上げだ。しかし、これを真実としてCNNが報道したのは、本当の話である。

CNNの社史に汚点として残るであろう、歴史的誤報が発生したのは1995年12月のこと。当時、世界中を騒がせたO・J・シンプソンの刑

事訴訟で、妻殺しの容疑をかけられていた同被告に無罪が言い渡された直後だ。

裁判の行方を見守っていた誰もが、判決に疑問を抱いた。その時、CNNのニュース・ルームに、奇妙な記者会見の招待状が届いた——「ソロモン・プロジェクト…裁判自動化プログラムが、シンプソンに有罪判決」。

CNNの記者は、記者会見の会場に指定されたニューヨーク市内のオフィスビルに飛

んだ。実験室らしき部屋には無数のコンピュータが並び、30人ほどの科学者が真剣な顔で作業している。

CNNの記者の前に、ソロモン・プロジェクトの責任者で、ニューヨーク大学教授のボスノ博士が説明する。

「我々は並列スーパーコンピュータと人工知能を組み合わせた、裁判自動化システムを開発しました。これを使えば、頼りにならない判事も、信用できない陪審員も要



ジョイ・スカッグス氏



りません」
 いかにも学者肌のボスノ博士の語り口は、落ち着いて自信に満ちている。CNNは特集番組で、このソロモン・プロジェクトを報じた。
 しかし後日、これは架空の人間を主人公にした、完全な作り話であることが判明した。

「特ダネ」を報じる米国の各紙

「ボスノ博士」と自らを偽った男の本名は、ジョイ・スカッグス(53)。メディア関係者の中では、知る人ぞ知る「Pankster(食わせ者)」だ。CNNの記者が目撃した科学者たちは、スカッグスが雇ったエキストラ俳優だった。CNNは翌年1月、訂正を放送した。
 スカッグスは1968年以來、こうした巧妙な作り話を

カネ儲けのためではない

餌に、40回近くにわたってメディアを騙し続け、そのすべてで成功を取ってきた。犠牲となったメディアには、ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト、ボストン・グローブ、AP、UPI、ABC、CBS……と、そうそうたる名前が連なる。これら大メディアに、中小のテレビ局や新聞も含めれば、数え切れないほどだ。

だからといって、スカッグスは、これで金を儲けるわけではない(大学の非常勤講師をして生計をたてている)。プロジェクトにむしる多大な資金と労力を費やしている。なぜ、こんなことをするのか。動機は後で説明するとして、まずは彼の代表的「仕事」を紹介しておこう。

●犬の娼家(1976年)

「性的欲求不満に悩む、ニューヨークの飼い犬に朗報。マンハッタンにある『犬の娼家』では、飼い主が50ドルを払

うだけで、そのペットにお相手を紹介、性的に満足させます。交尾する犬を満足げに見守る飼い主たち(全員エキストラ俳優)を、ニューヨークのテレビ局WABCが「事実」として放送。この番組は同年のエミー賞候補にノミネートされた。

●ファット・スカッド(肥満撃滅隊)(1986年)

「肥満は現代文明の敵だ」と、元海軍軍曹ジョー・ポーン(実はスカッグス)が結成した「ファット・スカ

ッド(肥満撃滅隊)」が、潜在需要3400万人の米ダイエット市場に奇襲攻撃をかける。腕利きの隊員が、肥満者を3交代制で24時間監視。医師の許したカロリー以上の食物は一口たりとも食べさせない。契約金は1日当たり300ドルで、最低3日間必要。一度契約したら途中解約はできない。「おかげで、こんなにやせることができました。涙を流して喜ぶ女性と、冷蔵庫の前に腕組みして陣取る隊員たち(女性も隊員も、全員スカラ)を、ABC放送が「斬新なビジネス」として全米に紹介した。

●犬肉レストラン(1994年)

在米韓国人のキム・ヤン・スー(スカッグス)は、全米の野犬収容施設1500か所に、つたない英語で以下のような手紙を送った。

「私は韓国レストランを経営する者ですが、お家で収容している犬を、1週間10ドルで譲ってあげませんか。犬料理にして出します」
 噂を聞きつけた各地のテレ

無責任な報道への警鐘

スカッグスは、なぜ、このような悪戯を繰り返すのか。記者の問いかけに、彼は次のように答える。

「我々は生まれた瞬間から、批判的思考と分析を停止するよう教育される。家庭、学校、企業、宗教団体、あらゆる組織が、人間の批判能力を殺してしまおう。それをさらに助長するのがメディアなのです。ジャーナリストは専門家でもないのに、その報道を人々は無条件に信用してしまおう。私はそれに警鐘を鳴らしたい」

スカッグスは60年代、ニューヨークのグリニッジ・ビレッジで絵画や彫刻などを手が

ける、芸術家としてスタートした。その当時の地元新聞が、ビレッジ住民に関して誤

解を招く報道をして以来、メディアを懐疑的に見るようになったという。その無責任な

報道姿勢を逆手に取った、作り話で逆襲を試みるようになったのだ。

スカッグスはメディアを騙すコツを「現実のほんの教歩先を行くこと」と表現する。どんなに面白い話でも、現実とかけ離れていけば最初から信用されない。しかし、「最近

過ぎなかつたが、精子バンクはその後、現実化した。今回の「美人モデルの卵子競争」は、さらに意表を突く話だ。まさに現実が虚構に追いつき、追い越してしまつたと言える。

噂はたちどころに広まり、宗教・教育団体が非難する一方で、両者に「頑張れ、負けるな」という励ましの声も多数寄せられた。新聞やテレビも報じ、「初体験」放送当日の8月4日、2人のウェブ・サイトにはアクセスが集中した。その結果回線がパンクし、放送は実現しなかつた。

とが、急に難しくなつてきた」と彼はこぼす。原因はインターネットである。幾つかの実例を見れば、ス

しかしNYハンター・カレッジのクレイ・シャーキー教授の調べによれば、「卵子競争」はウェブ・サイトが作られただけで実際に競争が成

しかし、そもそも2人は当日、「行為」に及ばなかつたようである。土壇場でおじけづいたのか、最初から騙すつもりだつたのか。これに関する新聞・テレビ報道は、誤報になるのか、ならないのか。

インターネット時代の報道……

真実と虚構の境目が曖昧に

カッグスの悩みが理解できる。たとえば、今年10月には米国のポルノ写真家が、「インターネット上で美人モデルの卵子を競争にかけろ」というサ

立した形跡はない」という。当の写真家は本気と言うが、このまま行けば企画倒れだ。そうなると、これは真のニュースと言えるのか、それとも世間の関心を引くための作り話に過ぎなかつたのか。

「インターネットの普及によって、メディアを流れる情報の、真実と虚構の境目が曖昧になってきた」という。これを冷静な目で分析し、正しい情報を伝えるべきメディアが、むしろ無責任な報道をおおる格好になつてきているのが、アメリカの現実だ。

実はスカッグスは1976年に、これと似た話でメディアを騙している。「有名人の精子を集めて売る精子バンク」がそれだ。当時は作り話に

似たような話は昨年も起きていた。米国の男女高校生が、2人の「初体験」の様子をビデオ撮影し、インターネット上で生放送すると発表し



ファット・スカッド——何となく頼もしい面々だが……

人社会全体に嫌がらせの電話や手紙が殺到した。「アジア人は何て野蛮なんだ。さつさとアメリカを去つて郷里に帰れ」

普段はひた隠しにされているアジア人への偏見と差別感が、メディア報道によつて一気に噴出した格好だつた。スカッグスは

「根本的な問題は、差別報道を受け入れる社会の土壌にある。アジア人社会に対する偏見があつたからこそ、メディアは私の話に飛びついてきた」と言う。

それにしても30年間で40回も悪戯を繰り返してきたのに、なぜバレないのだろう。「メディア自身が昔の報道を忘れてしまうからです。CNNは5回も騙されている。訂正報道は形ばかりの短い物で、まるで出さないメディアもある」

いまだに彼の作り話を真実と信じている人々も、実は多いのである。(ニューヨーク在住ジャーナリスト・小林雅一)